

鈴木安昭先生の御逝去を悼む

(学部紀要編集委員長) 中 野 聡

鈴木安昭先生は、1998 (平成10) 年4月1日から2008 (平成20) 年3月31日まで教授として、また、1998 (平成10) 年9月16日から2003 (平成15) 年3月31日にかけては学長として、豊橋創造大学に勤められた。先生が81歳で永眠されたのは、2011 (平成23) 年8月8日のことである。

先生は、1953年に東京商科大学 (現一橋大学) をご卒業、青山学院高等部教諭を経て1964年にカナダのモントリオール市にあるマギル大学 (McGill University) に留学された。帰国後、青山学院大学専任講師となり、1980年9月以降、2度にわたって青山学院大学経営学部長を、1995年から1997年までは青山学院大学副学長を務められた。この間、1986年に神戸大学で商学博士の学位を取得されている。

故鈴木先生の追悼論文集である紀要本号では、以下に、本学における愛弟子であり、また同じ学問領域を学ぶ学徒でもあった、芳賀康浩青山学院大学教授に先生の思い出を語って頂いた。また、優に100件を超える先生の研究業績のほんの一部に過ぎないのだが、先生が主に本学で執筆された文献と論文のリストを添えた。改めて先生の学恩を追想する契機となれば幸いである。

鈴木安昭先生の研究と教育

—豊橋創造大学で賜った学恩を振り返って—

芳賀康浩

初めて鈴木先生にお目にかかり直接ご挨拶させていただいたのは、私が新人教員として豊橋創造大学に着任した1998年のことだった。もちろん、それ以前に鈴木先生のお名前は存じ上げていた。政治経済学部からマーケティング研究を志して商学研究科に進学した私は、大学院に入学するとすぐに指導教授と先輩から商学・経営学に関する必読文献を与えられた。そのなかに鈴木先生の『新・流通と商業』（有斐閣、1993年）、『商業論』（神戸大学・田村正紀教授と共著、有斐閣、1980年）があった。とくに『商業論』は、先輩、同期の仲間との勉強会で輪読し、その後の商学・流通論に対する私の理解の基礎となった。私にとって鈴木先生と言えば、商学・流通論の代名詞であり（事実、商業・流通研究の大家であったのだが）、そのような学会の重鎮と新人教員として対面した時の緊張は今でもよく覚えている。そのとき、鈴木先生は、私の研究についていろいろと尋ねてくださったが、そのなかで「どのような本が好きか」と聞かれて、荒川祐吉先生（神戸大学名誉教授）の『商学原理』（中央経済社、1996年）が好きで将来あのような本を書けるようになりたいなどと、緊張していたにしろずいぶんとおこがましいことを答えてしまった。にもかかわらず、鈴木先生は同書についての私の拙い意見や感想を大真面目に聞いてくださり、荒川先生のご研究についていろいろと教えてくださった。思えば、これが鈴木先生の「研究の虫」に初めて触れる機会だった。

その後、豊橋創造大学に在職した5年の間に、鈴木先生から研究・教育について多くのことをご指導いただいた。

まずは、豊橋創造大学開学3年目、つまり3年生が誕生すると同時に開講された鈴木先生の「商業学Ⅰ・Ⅱ」、翌年の「商業政策Ⅰ・Ⅱ」を聴講させていただいた。この科目は『新・流通と商業』をテキストとして、その内容を2年間かけて解説するという非常に贅沢な科目だった。開講前に、「このテキストの内容を2年に渡って講義するのは、さすがに先生でも難しくはないですか」と大変僭越な質問をしたところ、「話したいことはいくらでもあるから」との余裕の回答を頂いた。そのお言葉通り、講義は毎回その日のテーマに即した先生のご経験や事例、または関連の研究にまで言及され非常に刺激的なものだった。『新・商業と流通』の行間を著者自らに紐解いて頂ける機会など滅多にあるものではない。

また、この講義の受講から、鈴木先生の研究者としての大きさ、奥深さを実感させていただきだけでなく、教育に対する真摯な姿勢も学ばせて頂いた。

鈴木先生は、多忙のなか、あるいは体調がすぐれないなか、新聞・雑誌の切り抜きからテレビ番組の録画など、補助教材の準備にもいつも時間を割いていらっしやった。また、講義

中に「この問題について私はこのように思うのだが、皆さんならどう考えるだろうか」と学生たちに問いかけていらした。その問いに対する答えを求めることはなかったが、学ぶことの面白さ、奥の深さを学生たちに伝えようという先生の想いを感じる問いかけだった。

鈴木先生に学んだのは教室のなかだけではない。当時鈴木先生は東京のご自宅から1泊2日で豊橋にお見えになっていたのです。豊橋に泊る日はよく夕食をご一緒させていただいた。私の車で大学から夕食を経て豊橋駅前のホテルに着くまでの間、鈴木先生から出てくる話題と言えば、本当に商業・流通に関することばかりだった。話の内容は、大手メーカーのグローバル・マーケティングから国内の伝統的地場産品の流通まで多岐にわたったが、取り上げられるのはテレビや新聞で報じられた「現実」に関するものだった。「歴史的、現実的事象を、統計、文献、現地調査等によって把握するとともに、目的に応じて整理すべき枠組みを構成することを念頭に置いた」（『日本の商業問題』有斐閣、2001年、はしがき）という鈴木先生の研究スタイルは、先生の生活スタイルそのものなのだと感じた。ただ、今となって思えば、現実との関連に頓着せず、抽象的な議論を好んでいた私に、現実根ざした研究の面白さ、重要性を教えようとしてくださっていたのかもしれない。

鈴木先生は工場見学もお好きで、それまでに見学された様々な工場の話をよく楽しそうにしてくださった。「君もマーケティング研究者ならば、製品がどのようにつくられ、どのように販売されているのか、その現場を知らなければだめだ」と言われ、それからは機会を見つけては工場見学をするように心がけている。最近ようやく工場見学の楽しさが分かるようになり、大学の講義などでもその話ができるようになってきた。このようなことでも鈴木先生にほんの少しだけ近づけたような気がして嬉しく思っている。

このほかにも、鈴木先生には研究について折々にご指導いただいた。いまでもよく覚えているのが「研究テーマは何を選んでもよいわけではない。やりたいこと、やる意義のあること、できること、この3つの条件がそろっていないとだめだ」というお言葉だ。まだ大学院を出たての私の研究の話聞いて、雲をつかむような話に聞こえたのだろう。私にでも分かるような言葉で戒めてくださったおかげで、何とかその後、質的にはともかく量的には研究業績を重ねることができている。しかし今でも気付くと、できるかどうか、意義があるかどうかを忘れて、興味の赴くままに独りよがりの研究に走りそうになることがある。その意味で、今なお私にはありがたいお言葉である。

また、あるとき「面白そうな本があったので読んでみたのだけれど、私にはあまりピンとこなかった。ちょっと読んでみて感想を聞かせてください」と1冊の本を頂いた。Dholakia and Firat, *Consuming People: From Political Economy to Theatres of Consumption* (Routledge, 1998年) だった。マクロ消費パターンに関する文献で、マーケティング研究においてはポスト・モダン消費者行動分析に位置づけられているものだった。始めは鈴木先生の守備範囲の広さにただ驚いたが、読んでみてさらに驚いた。まさに迷走していた私の研究の明確な道標となる内容で、その後繰り返し読むことになった。自分の研究課題すら上手く説明できない私の話を真剣に聞いて気にかけてくださっていたことに、感激すると同時に、もっと真剣に研究に取り組まねばと背筋が伸びる思いがした。

もうひとつ研究について「二足のわらじを履きなさい」という言葉を頂いたことがある。もちろん鈴木先生の二足のわらじとは、商業・流通研究と中小企業研究である。ただ、あらかじめこの二足に定めて研究を進めてきたわけではなく、もともと頼まれると断れないという鈴木先生のお人柄、曰く「人から頼まれたことばかりやってきたらこうなった」とのこと、確かに鈴木先生の研究業績一覧を改めてみると、多様なテーマで膨大な数の論文を執筆されている。二足のわらじの積集合だけを追求するのではなく、二足のわらじそれぞれの領域において十分な研究成果を挙げなければ、鈴木先生の仰る二足のわらじをはいたことにならないのだと思い知らされるばかりである。

このように、鈴木先生に研究への取り組み方からご指導いただいた私が、先生のご研究を評するような力もなければ立場にもないことは言うまでもなく、いま改めて先生の論文の何編かを読み直してみても、唯々憧れのような念を抱くばかりである。ただ、鈴木先生の代名詞ともいえる商業統計の分析に代表されるように、客観的なデータに基づく緻密な分析が鈴木先生の研究に一貫する特徴であるが、それに加えて商業、とりわけ中小・零細小売業者に対する愛情、あるいは優しい眼差しを感じるのが私だけだとすれば、それは豊橋で5年に渡り鈴木先生を「独占」できるという幸運な経験によるものだろう。

鈴木先生は、中小・零細企業が大半を占める商業の保護を主張するわけではない。むしろ、伝統的な小売業、その集積である商店街の衰退を客観的かつ冷静に分析している。しかし、その小売業や商店街の問題を単なる調査データとしてではなく、つまり他人事としてではなく、自らの問題として憂慮しているように感じるのである。豊橋の駅前商店街も、多くの伝統的商店街のご多聞に漏れず衰退の危機に瀕しているが、鈴木先生は食事の際も、ホテルのレストランではなく、そうした商店街のなかの古くからある食堂を好まれた。お時間があれば、駅前商店街を歩かれていたようで、豊橋に住んでいた私よりも、その店舗構成をよくご存じだった。

ある時、講義を終え、いつものように夕食をご一緒させていただこうと私の運転する車で大学を出たとき、鈴木先生が郊外にできた新しいショッピングセンターをご覧になりたいと仰った。当時でも地方ではすでに珍しくない大型のショッピングセンターであり、私もプライベートで良く利用していた。その建物をご覧になった時に先生が漏らした一言が今でも忘れられない。「この建物は便利かもしれないけれど、いかにも醜悪だねえ」。この言葉を聞いた時に、著作から伺える商業・流通への鈴木先生の想いは、そのごく一部だということに気づかされた。それ以来、鈴木先生のことを以前にもまして「格好良い」研究者だと思いうようになった。そう思うと、鈴木先生の論文には先生のこうした美学がにじんでいるように思えてならない。

今回、鈴木先生の思い出を綴る機会を与えられ、改めて振り返ってみると、大学教員としてのキャリアをスタートした最初の5年を鈴木先生のそばで過ごすことができたのは、この上ない僥倖だったとしか言いようがない。そして今、縁あって鈴木先生が40年以上に渡ってお勤めになった青山学院に奉職し、かつて先生もご担当された「商学基礎論」を担当させていただいている。もちろんテキストは『新・流通と商業』であり、講義ノートは、豊橋創

造大学で鈴木先生の講義を聴講したときのノートである。

研究においても教育においても、鈴木先生の背中はいまだはるか遠く、追い付くどころか近づくことすら難しく思う。しかし、鈴木先生はこうも仰っていた。

「大学院で師事した指導教授だけに師匠を限る必要はない。学びたいと思った先生の押しかけ弟子に勝手になれば良い。多くの師に学びなさい。」

ここまで書き連ねてきたように、豊橋創造大学で5年間、そしてその後も学会等で鈴木先生には多くの学恩を賜った。「鈴木安昭先生に学んだ」と胸を張って言えるよう、教育・研究に精進を重ね、このご恩に報いたい。

鈴木安昭先生の主要業績 1998(平成10)年～2006(平成18)年

著 書			
百貨店のあゆみ	共	平成10年5月	日本百貨店協会
新・流通と商業(改訂版補訂)	単	平成10年10月	有斐閣
商店街活性化のためのマネジメント	共	平成12年3月	全国商店街振興組合連 合会商店街近代研究会
日本の商業問題	単	平成13年2月	有斐閣
新・流通と商業(改訂版第2補訂)	単	平成14年4月	有斐閣
最新商業辞典[改訂版]	共	平成14年9月	同文館
新・流通と商業(第3版)	単	平成16年3月	有斐閣
新・流通と商業(第4版)	単	平成18年12月	有斐閣
学 術 論 文 他			
大規模小売店舗法から街づくり3法へ —意義と課題	単	平成10年9月	流通とシステム第97号 流通システムセンター
大学改革、社会構造変化への対応 —21Cキャンパス創造と計画～点検・評価か ら再開発・リニューアルへ～	共	平成11年12月	地域科学研究会高等教 育情報センター
長期不況下における小売業構造の変動 —1999年商業統計速報を中心として	単	平成12年12月	青山経営論集第35巻第 3号
商業集積と都市計画	単	平成15年3月	豊橋創造大学短期大学 部紀要第20号
流通政策の形成と課題	単	平成16年1月	『現代日本の流通と社 会』ミネルヴァ書房
デフレ経済化の中小企業—循環変動と構造変動	単	平成16年7月	商工金融第54巻第7号
(書評) 石原武政・矢作敏行編著『日本の流通 100年』	単	平成17年2月	日本経済新聞社
記載以外の業績については上記の『日本の商業問題』の末尾に記載されている。			